

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、男優陣および女優陣―

第十七節 坪内逍遙と築地小劇場（第三年三月『役の行者』）

柿落しの『海戦』から一年十ヵ月後、大正十五年春に初めて日本人の創作による戯曲が上演された。坪内逍遙脚本・小山内薫演出の大作『役の行者』がそれである。創立の当初築地において二年間は邦人の作品を上演しない、と創立の当初明言して、物議を招いた小山内であったが、観客から上演希望の創作劇を募ったものの、適当なものではなかった。小山内と土方が初演の『役の行者』を選んだ理由は、敬愛する坪内逍遙の雄大な戯曲で、演出欲を喚起しする内容だからとされる。① なお、明治末期から大正時代にかけて、坪内逍遙による他の戯曲は各劇場で頻繁に上演された。すなわち、『桐一葉』は歌舞伎座等において十三回、『沓手鳥孤城落月』は有楽座等において十六回、そして『法難』は明治座等において六回である。②

坪内逍遙作『役の行者』の上演（本間久雄著『坪内逍遙』）

坪内逍遙の『役の行者』は、その構想の雄大である点で、その哲学味に富んでいる点で、その詩趣の豊かな

① 秋庭太郎著『日本新劇史』下巻、五八一―五八二頁。

② 「上演年表」（『逍遙選集』春陽社、一九二六年。第一巻、付録三―二三頁。）

である点で、その措辞の瑰麗な点で、明治大正の戯曲界を通じての最も大きな傑作であることについては、今改めて収々するを要しない。しかし、その構想が余りに雄大であるためか、その登場人物には半神半獣とも云うべきグロテスクなもののあるためか、上演が困難だということは殆んど定評になっていて、公にされてからすでに十年近く経過した今日まで、上演されなかった。だから築地小劇場が今度率先上演して、多大の好評を博したのは、単に築地小劇場の成功としてばかりでなく、劇界のための大きな喜びの一つでなければならぬ。...

ほとんど上演が不可能とされていたこの作を、ともかくもあれほどまでに、舞台の上に見せて呉れた舞台監督小山内薫氏に、吾々は先ず感謝しなければならない。場面としては「西谷の魔所」が圧巻である。この場の一言主もいい出来である。その背景や舞台装置と相まって、この場は半神半獣的な、妖怪的な、神秘的な、浪漫的な複雑な味わいをもたらした。多少の難点はあっても、『役の行者』の上演はともかくも最近劇壇の記録すべき大きな事件である。①

飛鳥時代文武天皇の御世に修験者たる役の行者は、大和の国吉野で荒ぶる神一言主を屈服せしめ、鬼神に命じて村人の暮らしに奉仕させた。他方彼の隙に乘じた一言主と数多の妖怪は、反抗の勢いを取り戻し、女魔もまた役の行者を墮落に陥れるべく、美女に偽装する。数々の伝説を踏まえつつ逍遙は、恩恵を受けた古老の回想を通

① 本間久雄著『坪内逍遙』松柏社、一九六四年。二〇七―二一〇頁。

して、そうした行者の窮民救済をまず浮彫にした。

坪内逍遙作『役の行者』

第一幕第二場 山麓の一軒家

（大和国吉野郡）大峰の里。今の洞の辻付近らしい。間近く左手に寄って古風な農家がある。間口はやつと二間半ぐらい、見えている奥行は二間、家根は千木を聳えさせた杉皮葺き。・・・右手は山の裾で見切られ、見渡す正面は遠近の山々、いずれも樹木が繁茂しており、間近き丘のこなたには刈り跡の稲田が少し見え、その稲田の手前には清らかな小川が流れ・・・

主人らしい六五、六の爺が古風な原始的の竹の稲扱機械で、稲を扱いでいる。それより右手、ほとんど往還を占領して、二人の若い娘が穀竿を揮って、歌を歌いながら稲を打っている。姉は十八、九、妹は十五、六。二人とも標致よしで、日に焼けてはいるが、本来は色白である。

姉の名は比豆知、妹の名は江布利。稲打唄が続く。

唄♪♪

九つ小枝に皆実った。エーイエイ。色づいた。たアれに食わしよと色づいた。ヨイヨイヨイヨイ。

爺

さアさア、きつかった。まアまア、一休みせいと言うところじゃが、今日は朝の間から変な空模様で、今にもぼつりぼつり落ちて来そうじゃ。昼前にしまわぬと事じゃ程に、姉は早うお母さまの処へ往て、刈りためたたけを取って来いやい。早うせい、早うせい。

姉

あいあい。

と姉娘は丸太橋を渡って、田圃道を右手へと姿を消す。妹は箕を物置から持出しきて、打ち溜めた粃を粃を掻き集めにかかる。と来て突然に大ドロドロ。妹娘はびっくりして箕を落す。

妹

あれ、地震じゃ！

爺

いやいや、地震ではない。（ドロドロなお続く。）これがソレゆうべ話した、あの大峰さまの山鳴りじゃがや！

妹

え、ではあの山の主の祟とやらかえ？・・・

田圃道づたいに六十近くの婆、姉娘と一しよに、刈りためた稲を背負いつつ、急ぎ足で戻つて来る。

婆

（丸太を渡りながら）きつい山鳴りじゃったなう。ちようど十五年ぶりじゃ。

爺

（むづかしい貌をして）此間中の遠鳴といい、今のどえらい鳴りようといい、こりや何か西谷あたりで、事があつたに相違ない。

婆

何にせい、役のお行者さまはお不在、前鬼さん、後鬼さんまでござらっしゃんというから、きつとあの山の神が荒れ始めさっしやつたに違いない。・・・

妹

お父さ、山の鳴る仔細を話してください。山の主さんたいうは何じゃえ？・・・

婆

おのし達はなア、晩う生まれたによつて幸福じゃ。おら共の若い頃までは、ここいらは、それはそれは怖い恐ろしい処じゃったぞよ。此界隈十里四方というものは、山で無い処も深藪のように草や木が繁って、田畑もなく、人家らしいものは、只の一件もなかった。狼が昼日中うろつく。うわばみがのたくり廻る。そればかりではない。山猫じゃの、狒狒じゃの、荒熊じゃの、猪じゃ

のいう猛獣が、野にも山にも、のそのそ歩いておって、そつとでも人間の臭いがすりや、直ぐに跳び出して来て、取って食うた者じゃ。それを思うと、今の此安らかさは、みんなあお行者さまのお庇じゃ。これであの葛城山の磐橋さへ出来上っていようものなら、どのように人間の幸福が殖えたか知れんに、惜しいことであつた。・・・

山の主さんというのは、名を一言主さんというて、今から三、四十年前まではこの界隈きつての荒神さんで、それがまた毎日毎晩何遍となう、猛しい獣類の生き肝を食わしやらんでは、神通力が弱る神さまじゃげなで、それでその都合で、わざとここいら一円に猛しい獣類をはび殖しておかしやつたものじゃ。

人間のためにはそれがどのくらい迷惑になつたか知れん。月に二、三人ぐらいはきつと獣類の餌食になつて、非業の最後を遂げたものじゃ。役の行者さんがござらしやらんだら、この大和一円、人種が尽きたかも知れん。・・・あの活神様の行者様のお行力でなければ、とてもあの親子神をば祈り伏せることができんのじやつた。行者さんでさえ八一昼夜かかつて祈り伏せさつしやつたげな。

婆

それはそれは、えらい荒行をさつしやつたげな。

爺

それから行者さんは、母子の神を御眷族同様にさつしやつて、人助けのためにとて、まず手を著けなされたのが、あの盤橋じゃ。・・・葛城山から金剛山への道は、とてもとても並みの者では通うことのできん嶮岨じゃが、それを年に十五、六遍も往復するようにならんうちは、いっぱしに行人とは言われんことになつていたので、昔からそれをしようとして、命を落した者が、何百

人あつたか知れん。

婆

お行者がそれをふびんに思わしやつて、一言主さんに言いつけて「おのし改心んの証しにおのしの眷族は勿論、この界隈の山の主たちを残らず使うて夜も昼も、人間の目にこそ見えなんだれ、神たちが神通力で、小山のような大岩を幾つともいくつも運ばしやる、積ましやる、畳ましやる、見るみる谷と谷との間に連絡が付いて、不思議な岩の橋が出来かけたげな。

第二幕第二場 西谷の魔所

（向う一帯の鬱々たる密林。風、雨、電光、雷鳴）夜半。谷底から見上げると、右手も左手も削つたような千尋の絶壁である。右手の手前などは、その絶壁の頂きに樹木が繁茂している。・・・奇異な声で笑いさざめきながら手と手を繋ぎあつて駆けだしてきたものがある。見るといづれも奇怪不思議な、鳥に似て鳥でなく、獣に似て獣でなく、無論人間とは思われない。・・・この妖怪群は手に手を取って、奇怪な笑い声を発して嬉しげに駆けだしてきたが、やがて人間のよりは禽獸のに近い音節で口をきき出した。

妖の一

ほッえいれい！ほッえいれい！いひゝゝゝ、ひ！意ッ地なし！ぎッまア見れ！

妖の二

ほッえいれい！ほッえいれい！いひゝゝゝ、ひ！力なッしい！ぎッまア見れ！

一言主の挟まれている真下を、齒をむき出して見上げながら走り廻る。それを見おろして、睨みつけて

一言主

やかましいわい！うじ虫めら！新入りのうぬらまで見下げやがつて、おれを病みほうけた獅子か

虎のように扱やがる。今に見ろ、自在力を取返しやア思い知らせてくれるぞ！三十年前ならうぬらが覗くこともできん山だぞ、ここは！うん！うん！行者が何だ。行者が？たかが老いさらぼった人間だ。その老いぼれに縛られたこの態は何だ？このさまは！ああ、この五体に充ち満ちて、はちきれるようになっていた強い力はどこへ去った？おれの若い強い力は？どんな岩山の肋骨でも肩骨でも、おれがうんと息張って踏む力足には、おつびしげて、みじやけて、きのこの笠のようにおつびらいたものだ！・・・

妖の一

飲ンむなッてッた獣類の生血飲んだわ！いひ、ゝゝひ！

妖の二

食うなッてッた獣類のきたないもん食ったわ！いひ、ゝゝひ！

群妖

（一斉に）まッぐわった！まッぐわった！まッぐわった！いひ、ゝゝひ！

一言主

やかましいわい！食わんでおられるか？飲まんでおられるか？・・・おれは生れ出でん前の定めで、昼三度、夜三度猛獣の生き肝を食った上に、年に二度三度、月の輪が円うなりはじめて全円になるまでのなか一句の間に、かならず一度あの猛獣の七つ子の、そのなかの牡の子を、孕み子のうちにいきながら取り出して生き血を吸わねば、持ち前の通力が枯れてしまうのだ。・・・阿母の葛城も危かったのを、業通でやつと逃れて、行者めがこの山を離れる時があると、時々猛獣の生き肝を持って来てくれる。餌食さえあれば、元気が十倍する。

第三幕第二場山上ヶ岳の岩窟

窟はその地盤が平地よりはやや高く、総高さは一丈くらい、入口のたかさはやつと五尺・・・

千尋の断崖の向こう、溪谷を隔てた真正面には大天井、小天井の二峰がによつきりと屹立し、なおその左手には他のやや遠い山々が見えている。窟の内部、やや奥に浄衣を被て、角帽子をいただき、手に金剛杖を握って、ほとんど石の像かとおもうほどに寂然と瞑目して、結跏趺坐しているのは役者である。・・・やがて愕然として心づいた体で、くわっと両眼を見開き、

行者

一切の塵縁を断滅し、あらゆる恩愛を棄て、ことごとく無為に入って、金剛不壊の大誓願に住するおれが！山の主をも妖魅をも自由自在に駆り使うおれのところが、なぜ今日ばかりは動揺き騒ぐぞ？・・・

突然一個の目の醒めるような美女が、藤蔓にすがってやおらその半身を現わした。やがて杖と藤蔓とを力に、辛うじて岩路を登りおわって一休みして、なお微かに喘ぎながら此方へと進み来る。天女かと思う程に艶麗で気高い都美人で、飛鳥の都の朝廷などに仕えている采女でもあらうかと思われる。・・・年は十八、九。窟近くへ来ると、やや早足に進んで、たちまちはたと膝まづいて、行者に向って悲しく礼拝した。心づかずにとらしい行者は、このときはじめて頭を挙げて、きつと凝視したが、やがて少しく姿勢を正し、無言のまま半眼に見おろしている。女は哀れな涙の声で、

美女

お助け下さりませ！お助け下さりませ！

と言ったきりでしばらく泣いている。行者は次第に寂然となって、いつの間にか瞑目してしまふ。山鳴りもいつしか止んで、天地ともじんとなる。女はまた口を開く。

美女

行者さま、どうぞ私をおたすけくださりませ。人間の栄華や恩寵はほうんとうに春の花の一時よ

りもはかないものじゃということ、身にしみじみ思い知った者でござります。この黒髪を根元から切り払うてしまつて、全く男となりまして、いかな捨身の難行苦行をも積んで、活き神の行者さまに一生お仕え申す覚悟をして参った者でござります。活き神さま！活き神さま！罪障の深い女人のなかでもとりわけて罪障の深い私でござります。お慈悲でござります。どうぞどうぞ、お助け下さりませ！どうぞ、どうぞ！

おりおり嗚咽するので言うことがよくは分らない。行者はやつぱり瞑目している。美女はだんだん行者の傍らへ寄つてきて、泣きながら、とぎれとぎれに言う。

十六の秋から今年にかけまして、まる三年の間、帝の御寵愛を受けてまして、玉敷の大宮きつて、並ぶ者もない栄華の身の上となりましたのが因果となり、それはそれ口にも言葉にも言いようのない辛い苦患を受けました。それが為にいまさら悔やんでも帰らん罪業をも犯しました。・・・罪障の深い身を、どうぞ御不憫におぼしめし、お弟子になされて下さりませ。この苦患をお助け下さりませ！・・・

美女

行者の膝に恐る恐る手をかけてゆずぶる。行者の顔に苦悶の色が見える。・・・

女をば不浄な者じゃ、汚らしい者じゃと言ひふらされた釈迦牟尼仏さまが怨めしい。なにが不浄じゃ？男とどうちがう？どう劣る？男には己れ一代を作り変える力はあつても、新しい世代を作る力はない。世の中に女がなかったら、新しい世はは生まれん。人を生むも育てるも導くもみんなみんな女の力じゃ。・・・これほど事を分けていうものを聴いてくれん！何たる酷い人じゃ！ああ悲しや！悲しや！（狂人のようになって）ええ、この憎い活き仏さまめが！怨めしい、没義

道な活き神さまめ。なア、これ、せめてもわしの冥加のためじゃ、さ、活き神さまの手でこの手をば握つて下され。さ、ちよつと下され。ああ、せめてその蒼い、尊そうな頬へ触りたい。（両手を行者の肩へ掛けて）さ、おお、石仏のようかと思うたら、ああ嬉しや！やつぱり温い血が通っている！さ、冥加の為じゃ、活き神さまの息をこの口へ吹き込んで下され。さ、この口へ！

この時まで寂然と石の像のようになっていた行者が、いま唇をさしつけた妖婦の体へ、その手を触れたかと思ふ間もなく、女は二、三間此方へたちまちころころと抛げ出された。が、すぐに猫のようにひらり宙返りして起き上つて、猛然として飛びかかろうとする。と、行者すくつと立ち上つて、大きな声で、

行者

喝！邪神めが！

あざとい己れなぞの業通で惑わされる行者と思うか？ たつた一匹の白蟻を這い込ます穴からも雲にひいる喬木が朽ち倒れる。たつた一筋断ち残つた母という執着の目に見えん鉄線にからみつかれて（大息をつきて）五十年を一日のおのれの行の息の根が、すんでの事に縊られうとした悩乱の隙に乗り、おのれ大胆にも邪妖を勧めて、墮さうとしおつたな。・・・喝！

女怪はただ一声岩をつん裂くような苦叫を發して、たちまち千尋の谷間を目がけ、身を

『役の行者』公演配役（築地小劇場第四五回）

行者の母〓東山千栄子 その従者〓滝沢修 お爺〓東屋三郎 姉娘比豆知〓山本安英
 妹娘江布利〓藤井悦子 お婆〓谷崎龍子 廣足〓汐見洋 前鬼〓小杉義男 青虫〓瀧沢修
 後鬼〓高橋弘子 一言主〓薄田研二 武官〓藤輪和正 役の行者〓青山杉作
 女怪葛城（美女）〓岸輝子 樵夫〓生方賢一郎・伊達信・島田敬一 その他妖怪・従者多数
 演出〓小山内薫 演出助手〓水晶春樹・土方与志 舞台装置〓伊藤熹朔 舞台効果〓和田精 ②

飛鳥時代の修験者、役の行者（役小角・優婆塞）を語る伝説は、平安初期に編まれた正史『続日本記』を始原とする。呪術を用い、空を飛ぶ彼の足跡は、役小角や優婆塞とも名付けられて、以後さまざまな史書、物語、絵

① 坪内逍遙作『役の行者』（『逍遙選集』春陽社、一九二六年。第一巻、四九六―五〇三、五二四―五三七、五五一―五五二、五七一―五七九頁。

坪内逍遙作『役の行者』岩波書店、一九五二年。六一―一三、三一―三八、五一―五二、六七―七二頁。

② 『築地小劇場』第三巻第三号、一六／一七頁。

巻物で語られる。① 『今昔物語』第十一巻本朝部においては、世の殺生を禁じ疫病を終熄させた聖徳太子、各地の難所に道を造り橋を架けた僧侶行基に続く第三話として位置づけられた。吉野において荒ぶる神を屈服させた役の行者は、鬼神に命じて、水を汲ませ薪を拾わせ、葛本の山から金剛の山へ通じる橋を建造させる、と。

「役小角」（『続日本紀』巻一 文武天皇）

丁丑 役君小角伊豆ノ島ニ流サル 初メ小角葛木山ニ住ミテ呪術ヲ以テ称セラル 外従五位韓國連ノ連広足師トス 後其ノ能ヲ害ヒテ妖惑ヲ以テ讒ル 故ニ遠キ処ニ配ス 世相伝フ 小角能ク鬼神ヲ役使シテ水ヲ汲ミ薪ヲ採ラシム 若シ命ヲ用ヒザレバ即チ呪ヲ以テ之ヲ縛スト ②

「役優婆塞誦持呪駈鬼神語」（『攷証今昔物語集』第十一巻第三話）

今昔本朝〇〇天皇ノ御代ニ役ノ優婆塞ト申ス聖人御ケリ 大和国葛上ノ郡茅原ノ村ノ人也。 俗姓ハ賀茂役ノ氏也 年来葛木ノ山ニ住テ藤ノ皮ヲ以テ衣トシ松ノ葉ヲ食物トシテ四十余年彼ノ山ノ中ノ崛ニ居給ヘリ 清キ泉ヲ浴テ心の垢ヲ洗ヒ浄メテ孔雀明王ノ呪ヲ誦ス 或時ニハ五色ノ雲ニ乗テ仙人ノ洞ニ通フ 夜ハ諸

① 〔参照〕 銭谷武平著『役行者集成』東方出版、一九九四年。

石川知彦・小沢弘編『図説役行者―修験道と役行者絵巻』河出書房新社、二〇〇〇年。

② 『続日本紀』巻一文武天皇（『国史大系第二巻 続日本紀』一九二九年、吉川弘文館。七頁。

の鬼神ヲ召駈ツカヒテ水ヲ汲セ新ヲ拾ハス 然レバ此ノ優婆塞ニ随ハザル者無シ

而ルニ金峰山ノ蔵王菩薩ハ此ノ優婆塞ノ行出シ奉リ給ヘル也 然レバ常ニ葛木ノ山ト金峰ノ山トニ通テゾ御ケル 是ニ依テ優婆塞諸ノ鬼神ヲ召集メテ仰セテ云ク 我レ葛木ノ山ヨリ金峰ノ山ニ参ル〇〇〇道ト為ムト 諸ノ鬼神此ノ事ヲ承テ〇〇〇侘ム事限無シ 然レドモ優婆塞ノ責適レ難キニ依テ鬼神等多ノ大ナル石ヲ運ビ集メテ造リ調テ既ニ橋ヲ互シ始ム

而ルニ鬼神等優婆塞ニ申シテ云ク 我等形チ極テ見苦シ 然レバ夜ニ隠レテ此ノ橋ヲ造リ渡サムト云テ夜々急ギ造ルヲ優婆塞葛木ノ一言主ノ神ヲ召テ云ク 汝ジ何ノ恥ノ有レバ形ヲバ隠ス可キゾ 然ラバ凡ソ造渡スベ可ラズト云テ、嗔テ呪ヲ以テ神ヲ縛テ谷ノ底ニ置ツ。

其ノ後一言主ノ神宮城ノ人ニ付テ云ク 役ノ優婆塞ハ既ニ謀ヲ成シテ国ヲ傾ケムト為ル也ト 天皇此ノ事ヲ聞給テ驚テ官使ヲ遣テ優婆塞ヲ捕ヘシメ給フニ空ニ飛ビ上テ捕ハレズ 然レバ官使優婆塞ノ母ヲ捕ツ 優婆塞母ノ捕ハレヌル見テ母ニ替ラムガ為ニ心ニ態ト出来テ捕ハレヌ

天皇罪ヲ勘テ優婆塞ヲ伊豆ノ国ノ島ニ流シ遣ツ。優婆塞其ノ所ニ御テ海ノ上ヲ浮テ走ル事陸ニ遊ブガ如ク也 山ノ峰ニ居テ飛ブ事鳥ノ飛ブガ如ク也。昼ハ公ニ畏リ奉テ流所ニ居タリ 夜ハ駿河ノ国富士ノ峰ニ行テ行フ 願フ所ハ此ノ罪ヲ免サレム祈ルニ三年ヲ経テ公優婆塞罪無キ由ヲ聞シメシテ召し上ゲラレヌ ①

① 芳賀矢一編『攷証今昔物語集』富山房、一九二一年。中巻、四九頁。

創立二年後ようやく日本人による戯曲が上演されたことには、慎重な配慮と多難な経緯が存していた。柿落としを控えた大正十三年五月、慶応大学で講演した小山内薫が、日本の創作をさしあたり排除すると述べ、多大の紛糾を招いたである。「上演脚本であるが」と彼は言明した。「目下二年間許りは西洋物許り演る筈である。何故日本の物を演らぬか？これに対して私は簡単に答える。私達は演出家として日本の既成作家ーもし私自身がそうであつたらそれも含めるーの創作から何等演出欲を唆られない。もし我々の演出欲を唆る物があらばそれが何処の国のものであつても演ずるつもりである。世間に知られない作家の傑作は實際世の中によくあるがそういうものでも見当れば、演ずるつもりである。決して日本の芝居を毛嫌いして西洋の真似をするのではない。日本の脚本にそういう刺激がないから止むを得ず演ずるのだ」① これに対して作家の山本有三や菊池寛から演劇雑誌をとおり強い反論が示されたが、小山内は自説を固持し、約二年間邦人による創作の上演を斥けていた。

小山内薫『役の行者』の演出について

坪内逍遙先生の戯曲『役の行者』がこの三月二日から十五日間築地小劇場で舞台に載せられる。演出を担当した私は、目下寢食を忘れて、その準備に忙殺されている。それ故、落ちついて何か書くというような気持にはとてもなれない。實際また何も書くことはないと言って好いのである。「総ては舞台だ。」この一言より外に言うことはないのである。

① 小山内薫「私の築地小劇場」『小山内薫演劇論』全集第二巻、四四頁。

先ず第一に私達は坪内先生に対して、この戯曲の上場を許して下すったことを感謝しなければならない。だが、それも舞台で感謝するより外に道はないと思っている。坪内先生は何一つ注文らしいものをお出しにならなかった。総てを私達に一任して下すった。そして、「どうでも君達の思うように自由にやってくれ」とまで言われた。坪内先生のような大先輩からこういう詞を戴くことは非常な光栄であると同時に非常な重任である。私達は今非常に喜びながら非常に重い荷物を担いでいるのである。その喜びも苦しみも、恐らくは舞台が物語るだろう。

「自由に」という先生の詞は、少からず私達を励ました。私達は勇氣を持って先生の戯曲にぶつかって行った。そうして、おもうさまにこの戯曲を自由に取扱って見ようとおもった。併し、私達は脆くもこの戯曲に征服された。勢い込んで取組んで見事に投げ出されてしまった。「自由に」などとは思っても寄らないことであつた。

「忠実に。」「忠実に。」それより外に、この戯曲を扱う手段はないということが分かった。・・・

私は『役の行者』の稽古に掛かる前に、俳優達に向つて言つた。「諸君は今まで外国の芝居ばかりやつて来た。それ故、はじめて日本の芝居をやるということが恐ろしいかもしれない。併し、決して恐れることはない。はじめて日本の芝居をやるのだからと言って、何も恐れる必要はない。諸君の今まで学んで来たもの、諸君のいままで嘗めて来た経験、それらの総てを集めて、これにぶつかって行けば好いのである。歌舞伎劇から、新派劇からも、いうところの新劇からも、何も借りて来る必要はない。吾々はどこまでも〈吾々の

もの〉で戦おうではないか」 ①

小山内薫『役の行者』の第一夜を終えて」

兎にも角にもやつと初日だけは済ませた。肩の荷が半分はおりた。勿論足らぬだらけ、到らぬだらけである。ここ三、四日はまだまだ為上げにかかるだろう。

併し、私は満足している。自分にあるだけの力は悉く出し切つたのだから。私ばかりではない。演技部も装置部も衣裳部も照明部も効果部も、みんな全力を尽してくれたのだから。装置部は一週間から徹夜を続けた。照明部の主任は肺炎と戦いながら働いた。しかも、それは唯無目標不統一に働くのではなかった。どの部員も唯一つの演出プランに力を傾注して協同の実を挙げたのであつた。・・・

この戯曲を一貫するものは〈人間〉と〈自然〉との闘いである。そうして〈人間〉が〈超人間〉となり、〈超人間〉のエゴオの威力が終に〈自然〉を征服するのである。

それ故、第一の幕より第三の幕まで絶えず舞台を威圧しなければならないのは、〈自然〉の威力である。音及び光の方面では、雷、稲妻、雨、風、中でも不断に人間を脅さねばならないのはあの恐ろしい山鳴りである。形の方面では、深い谷、偉大な樹木、高山の絶頂、雲を突くような岩石である。・・・

私達が私達の理想とする国劇を樹立する為に、先ず何よりも敵として戦わなければならない相手は、〈伝

統的な国劇」である。即ち歌舞伎劇である。歌舞伎劇の精髓は〈型〉である。〈型〉および〈型の変形〉以外に歌舞伎劇はないと言っても過言ではない。

歌舞伎劇の〈型〉は演劇の本道として、何百年来日本の民衆を支配して来た。その根は深く、その枝葉は生い繁っている。誰も彼もが意識せずに、それを〈唯一の劇〉だと思っている。そして、少しでもそれから外れたものは、劇ではないと思われている。

私達は先ずこの〈伝統〉と戦わなければならない。〈型〉を破壊しなければならない。そうして〈伝統〉を離れ、〈型〉を無視して、全く別に新しい自由な〈私達の劇芸術〉を作らなければならない。この二年間、外国の劇ばかり演じ続けて来たのも、一つはその基礎的作戦であった。

私が今度の演出について、特に強く働かせたのは、この意志であった。「歌舞伎をはなれよ。」「伝統を無視せよ。」「踊るな。動け。」「歌うな。語れ。」私はこう絶叫し続けた。①

劇壇長老の大作を初演したことに識者からも期待と称讃が寄せられ、小山内はじめ劇団員の奮闘もあって、十五間の興行は驚くばかりの盛況であった。公演は更に一週間日延べとなり、それでもなお毎夜客が溢れたされる。連日満員続きで、その収入高も築地小劇場の歴史において最高となった。② 浅野時一郎の回想により観客席

① 『『役の行者』の第一夜を終えて』『小山内薫演劇論全集』第二巻、二六九―二七一頁。

② 秋庭太郎著『日本新劇史』下巻、五四―一五四七、五八二頁。

における原作者坪内逍遙やフランス大使ポール・クロードルの様子も伝えられる。

『役の行者』の上演と坪内逍遙の観劇（浅野時一郎著『私の築地小劇場』）

『役の行者』（第四五回公演）。あれほど問題をつくり、あれほど周到な演出の効果を上げ、あれほど熱気のある舞台を味わせてくれた芝居は、旧築地の百を超える演出のうちでも珍しいことであった。

私は風邪をひいたか何かして、見たい見たいと思いつつ四月の二日になって見に行ったが、その日はちょうど作者の坪内博士の姿が客席にあって、能面のように端然とした博士のお顔を背後に感じながら、博士のたくさんの史劇は歌舞伎で演じられるけれども、一番作者の内生活に近いこの作品が、書かれてから十三年ぶりで初めて舞台にかかる今日の作者の感慨を想像したりした。

序幕の山鳴りのとどろき、二幕目の西谷の魔所の奇怪なる咆哮、三幕目の壮大な破壊のあとの厳肅なる静寂、みな夢中になるおもしろさだった。舞台効果のすばらしさ、特に序幕のあいた時から最後の大破壊の時まで、始終観客をおびやかす山鳴りの音が非常によくできた。・・・

役者はそろって上出来であり、軽い役の人ほどよくできたのは当然として、青山の行者、薄田の一言主、岸の女神、小杉と高橋の前鬼・後鬼、山本の姉娘とそれに化した女神、みな力いっぱい力の力演であった。しかし、作者が第三幕の演出に不満を表明されたということを考慮に入れて振り返ってみると、三幕目の青山の演技には力量感が不足していたといえないこともない。作者は恐らく前述のように九代目団十郎とか、その他声量豊富な、力感を表現する技倆を持った歌舞伎役者を考慮に入れていられたのだらうと想像する。し

かし、そういう役者を使った場合、三幕目はかなり歌舞伎式になる危険がありそうである。たとえば討ち手が行者の母を檻にして行者の下山を迫り、ついに母を切るところや、女神が娘に化けて行者を誘惑しようとする場面などである。

青山はそういう場面をきわめて理論的に処理していた。秋田雨雀がいったように、作者が歌舞伎から解放されて、歌舞伎の伝統を離れた普遍的な様式を採用しているところにこの戯曲の意義があったので、作者の他の史劇に比べて一団と高い位置に置かれるのは、その歌舞伎からの解放のためである。青山の演技、小山内薫の演出方針が作意に添うものとして評価されるのは、その解放に忠実だからであった。

とにかくこの芝居は築地には珍しい大入り続きで、日延べもしたし、ソ連の作家ピリニャークとか、フランス大使で詩人のポール・クロデルらが観劇した、という報道も出るほど一般の注意をひいて、大成功のうちに終った。しかし二二日間の入場者の総計は七千五四三人ということであった。築地は最高の大入りでも、このように一日平均三五〇人前後であった・・・

私は四月二日にこの芝居を見に行き、作者と同じ客席で見たのである。最初の予定では四日が楽であったから、この日は楽の二日前で、作者が見る日としては遅いのである・・・坪内博士は自作の上演には熱心に稽古に通われ、細かい注意を与えられるのが習慣だといわれていたから、こんどのように演出もまかせきり、稽古もまかせきりという態度は意外であった。失礼な憶測だが、作者は最初から築地の上演には期待をかけていなかったのではなかろうか。未熟な未知な役者たちと、自分とはもともと行き方の違う演出者とは、自分が空想しているような舞台はできないだろうという考えが、作者の足を止めていたのではあるまいか。そして求められるままに楽近くなってやって来てみたら、案外いいところもある。―第一幕は作者は激賞さ

れたし、第二幕はまず及第であった。この第二幕はピリニャーク夫妻も推賞するところだった。しかし肝心な三幕目はやっぱり自分の意に添わないと見てとって、辛い注文を呈したのである・・・

作者は当時の幸四郎・梅幸・左団次（皆先代）による上演を考えていたらしいので付言すると、薄田の一言主は気合がこもった熱演であったが、声量の点でふじゅうぶんだった。この役は最初の一吼えからして劇場全体にひびきわたるような声がほしい。そういう反響装置もしてあったようだが、長く続くふはふじゅうぶんに聞こえた。女神は岸輝子の熱演で、女優には気の毒なようなグロテスクな扮装で奮闘していたが、この役もことによると女形のほうが効果をあげたかのしれない。

先ず第一にこの劇のキイノートを握っている山鳴りの響きに、容易ならぬ苦心の跡を見る。この山鳴りの響きは、あたかも『皇帝ジョオンス』における太鼓の音と同様、この戯曲に絶大の効果をもたらしめている。太鼓の音がジョオンスの運命を決したと同じく、山鳴りの響きはこの戯曲の本質的要素をなすものである。而して、そのエフェクトは絶対価値である。

第一幕の幕開きの鄙唄と打穀器の音、茅屋の赤い襷と竹叢の手順と配置もさる事ながら、幕切れの夕立の急速な雨足と、竹を揺がす風の姿に絶妙な効果がある。

第二幕はグロテスクな美である。舞台一面を被う巨大な楠、その股に挟まれた男獣神の呻きと、それを救おうとして気違いのように荒れ狂う女獣神。遙かの谷間の空に沈黙を守る弦月。陰惨と怪奇と妖気は四方に満ちみちている。あの月の色がもっと赤かったら、一層面白かったであろう。三幕の中で最上級に位する場面である。

第三幕では幕切れの役の行者の昇天がすばらしい。峨々たる岩窟は役の行者の信念の叫びに、轟然たる山

鳴りと共に、巨人の姿を現出する。轟々たる世界は静寂に沈み、空の一角に彗星横たわり、群星は静かに瞬く。実に壮麗な幕切れである。而してこの力は戯曲の持つ力であると同時に、演出者の放つ閃きである。①

本邦初演に先立つ三年前、『役の行者』が『エルミット』と題し仏訳された。パリにおいて上演には至らなかったが、これを機縁にフィガロ等の新聞紙で坪内逍遙とその業績が紹介される。左記の一文は機関誌『築地小劇場』に掲載され、執筆者の吉江喬松は第一次大戦の前後フランスに留学し、帰国後早稲田大学で仏文科を創設していた。

吉江喬松『役の行者』（『築地小劇場』第三卷第三号）

『役の行者』の仏文訳は『新曲浦島』の仏文訳とともに一九二〇年に出来上ったのであった。最初は両者とも巴里の劇場で上演したいという先方の希望から起ったことである。舞台装置や音楽や振付けの問題で、なかなか早速にその運びにはならないのである。・・・劇のデオオルでも作曲でも、舞踏は勿論のこと日本のものであり、演者その人等もことごとく日本人であることが望ましく、また然るべきが当然であると思う。ただ場所を巴里の大オペラか、シャンゼリゼ座か、シャトレ座かを用いるというだけにしたいのである。

こういう仕事は二、三の人の手だけでは出来ない。国外へ日本の芸術を送り出すという事には一般が、多

① 浅野時一郎著『私の築地小劇場』一五八―一六一頁。

数が協力してかからなければいけない。巴里の大オペラで年々のように、西班牙の新劇や伊太利のオペラやロシアのバレエが演じられるにしても、その背後にはみなそれぞれの国の一般者の方が働いているのである。この意味で巴里は芸術の競技場である。

この競技場へ出ている日本従来者の唯一の芸術は浮世絵である。近代の仏蘭西印象派の芸術は浮世絵を無視しては解せられない。恐らく世界の文明、思想、芸術上、日本が従来なした影響は、唯一浮世絵のそれだけであろう。・・・

現在の大詩人の一人であり、アカデミシアンであるアンリイ・ドゥ・レニエは、新聞フィガロの日曜の文芸付録で、『エルミット』（『役の行者』）について書いているそのなかでこう書いている。

「坪内逍遙氏は近代日本の最も重要な作家の一人である。彼はかつて小説の形態を一新せしめた。彼の史劇にいたっては、舞踊、言辞、絵画、歌謡、詩歌の調和よき配合を具するコレグラフィックの劇曲と共に著名である。これ等のものと全く同種類ではないが、彼の作『エルミット』は偉大なる光景を観ずる象徴げきである。行者は即ち自然、言い換えれば外部世界を降伏せしめ、最大の自我に到達し、宇宙の深奥意識を捉えんとする力を象徴している。この解脱、この征服は争闘なしではなされない。坪内逍遙氏の劇が表示するものはこの争闘である。読者は『エルミット』を読むにあたって、日本の芸術家の驚嘆に価する想像が、人間、鬼神、怪異を配合する画帖をひもとく思いがあるであろう。『エルミット』の著者は観念の美、表現

の力に於て偉大なる芸術家である。」①

同じく『築地小劇場』の翌々号には『役の行者』への劇評が四点収録された。いずれも本邦初演の快挙を祝福し、入念な舞台装置とともに、青山杉作や岸輝子の演技が称讃されている。

湯浅輝夫「感激と興奮に打ちくだかれて」(『築地小劇場』第三卷第五号)

築地小劇場は第二のスタートを切った。今度の『役の行者』の演出を見た私はそう感じた。この『役の行者』か『海戦』の時と同じ感激と興奮に私を打ちくだいた。打ちくだかれた私は、膝まずいて双手を挙げて、この偉大な復讐を祝福した。復讐！そうだ、実にすばらしい復讐だ。二年前の合評会に対する小気味よい復讐ではないか。ただ感情をもって、ただ言葉をもって、毀誉をほしいままにした彼等に対する答弁は、かくの如き立派な実行によってなされている。それは余りにもすぐれた答弁ではないか。実に実行は火花を散らす！

『役の行者』の全幕は、神と人間の戦いである。神人と人神との闘い、魔神と人間の争闘史である。他力と自我の戦闘である。その絶大なスケール、その豪壮なる内容、その爛たる神秘と幻想、而してグロテスクな美の眩惑！

① 吉江喬松『役の行者』『築地小劇場』第三卷第三号。

かく脚本は壮大である。而して演出は広壮である。脚本は無比無双である。而して演出は号砲完全である。完全！実に演出はこの二字に尽きている。何に一つ注文をされなかった坪内氏も偉いが、その無注文の脚本を自由に使駆して、完成した小山内氏の手腕は恐ろしい。作者と演出者の融合！それはこの『役の行者』にして初めて言い得る所である。私は初めて演劇の真髄に触れた氣持がする。演劇はこうなければならぬ。これこそ真の演劇である・・・

青山の役の行者。態度、音声、すべて適役である。母の恩愛に後髪引かれる人間味から、それを振り落として自己の力を発見する直の心の苦悩は色濃く描き出され、特に最後の台詞「自信は力だ！力は自信だ！」以後の演技は、実にこの俳優独自が籠っていた。ブランドは「一切が無力」と叫んでいる。だが、役の行者は「個は全だ」と叫ぶ。面白い対照ではないか。

岩の葛城。前半の女獣神は出色である。呪いに封じられた夫の男獣神を想う情愛もよく現れ、彼の神通力を蘇らせんと、遙々海を渡り山を越えて、髪に包んで持って来た胎児は息絶えて、その血はかえって一言主の腹に毒を注ぐ。その驚き、その悶え、而してその忿怒と呪咀の形相！これ優として全力的の舞台である。後半の美女は嬌態が際どい所めで演ぜられたに拘わらず、あまり効果の上らなかったのは惜しいことである。美貌と潤いに欠けていたためではあるまいか？メイクアップはもつと濃艶に工夫したかった。

薄田の一言主。木の枝に挟まれた魔神の凄まじい形相！そのおどろな髪、咽喉から胸へかけての不気味な色、腋の下から脇腹までの物凄い毛の波。そうしたものが、女獣神の葛城の全体と対比して、一倍グロテスクな美を発揮していた。ただ声量に乏しいのと、科白のぞんざいなのが難である。

佐々木金之助『役の行者』手記（同右）

吉江先生お一人かと思つたら、早稲田の先生方の総見という所で御歴々がならんでいられるのには驚いた。五十嵐、山岸、金子諸博士、その他山口剛、本間久雄、谷崎精二、日夏耿之介、中村吉蔵の諸氏が中列のベンチの後方を二列占領している。大山郁夫さんが奥様御携行でいらしている。こんな日に来合わせた自分は光栄であると同時に大いに窮屈であつた。・・・

巴里では何故、舞台装置の下図までひかれて上演せられなかったかというと、それは音楽が伴わなかったからである。今回築地では音楽なしに之が演ぜられた。併し私が考えるに音楽が協力したならば更に一層効果があつたであらうと思う。第一幕と第二幕は殊に然り。『役の行者』はグラン・オペラたり得るかも知れないと、自分は思つた次第である。

小山内氏が『東京朝日』や『読売』に述べられている所を見ると、俳優諸君の演技もさることながら、舞台や衣裳に並々でない苦心が払われているということであるが、くだくだいうまでもなく、驚くべき成功である。・・・

さもあらばあれ、『ヴェニス商人』以来の珍しい感激を味つて自分は友人と共に黙々として、演了後の玄閑へ出て来ると、男獣神一言主に扮した薄田研二君の姿を認めた。自分はもうすこしで近づいて行つてお世辞を謂いたい位であつた。それほどこの一癖ありそうであつた薄田君はこの度は成功を勝ち得たのである。でも自分はこわくて近づく気にはなれなかつた。

平野涙路『役の行者』を見る（同右）

築地小劇場が第一回の創作劇上演に際し逍遙博士の『役の行者』を選ばれた事に感激はまず集められねばならない。何故ならば、それは真の意味に於ける我国創作劇の誕生を祝する雄叫びであり、揺籃を飛び立つはばたきであるからだ。

自然に挑戦する偉大なる超人の努力、小我を捨て大我に就く悟道と解脱とは、東洋哲学に於ける真髓であらねばならぬ。

それから次に、吉江氏の所謂「外国で上演されぬ内に日本で演る」事の出来たのを心から喜ぶたい。まあよかったと思つてホットしたのである。まったく、小劇場がなかつたら、誰が演り得たろうかと案じたところの不思議もなからうではないか。・・・

第一幕の山麓の一軒家で、背景の峰と峰の間のパーミントの様な空は、あの浅い舞台を非常に深く、遠く見せていた。藤井氏の江布利が一寸眼にはモダンガールの様に思わせたけれど、あれはあれでいいんですよ。・・・比豆知と江布利の歌う妙調に聞き入ったものです。・・・土方氏の牛鞠、東屋さんの爺、東山さんの老女、みな立派でした。八十も過ぎたであらう老女のいやさ、泣くにも涙の持合わせが乏しかろう老女の健康さ、之も亦義まずにはいられませんでした。谷崎さんの姿はよく出来ていたと思います。雷雨が襲う前の静けさには真に迫るものがあつた。

第二幕の西谷の魔所は深刻でした。自然の奇怪の描写が、巧みに演出されていました。この原始的背景の演出には、どれだけ演出者が苦勞された事だろうと思ひました。あの神秘的な三日月が、岩橋の上に出ない

で下にありのなんぞ、深い深い谷を思わせるに充分でした。野人共の舞踏、グロテスクな乳房の輪郭、奇声喚声、これらのものは一丸となって、ワイルドな交響楽を奏でていました。それから葛城が岩橋を渡ってやって来る時、黒い全身をインジゴ―お夜空に浮かべたその刹那のポーズが、忘れられない印象を与えました。あれは何と云っても素敵でした。・・・

終幕の大岩に、私は非常に美しい曲線を見て喜んだ、実に巧みにそれに右手の階段が又たまらなく好きでした。・・・青山氏の行者は適役の最なるものでしょう。あれを演り得る資格を有するものは、天下広しいえども、冷静な、そして理知的な東洋の紳士を除いては有り得ないでしょう。そして青山氏がその優れたる一人である事は否めないに違いない。①

主役たる役の行者に扮した青山杉作は、築地小劇場では同人として最初演技部に属した。踏路社以来の豊富な経験を生かして、山本安英や千田是也を指導し、やがて演出者としても小山内薫・土方与志と並ぶ重要な地位を占める。しかし、こうした一人二役には微妙な窮地と支障が内在した。青山の回想はこの時期における迷いを述べたあと、『役の行者』演技に係わる手短な説明へと進む。

演技・演出の迷いと『役の行者』の舞台（青山杉作「回想記」『青山杉作』）

① 「観客席より」『築地小劇場』第三巻第五号、二八―四六頁。

このころ私は私自身の危機を感じていた。というのは、前にも書いたように私は演出のかたわら俳優の仕事をしていたわけで、そのこと自体は多少の不便は伴うにしても、別に困難だと感じはしなかったのだが、私自身のなかに動揺するものがあつた。若い研究中の俳優たちと共に舞台に立ち、しかも私が演出者であるという意識は、私をして純粹の演技者たることをさまたげた。舞台に立っていながらつねに演出者としての神経が働いているのだから、どうしても自己のはいゆうとしての注意が散漫になってしまふ。ふと舞台に沈黙が流れているのに気付くと、それは自分がせりふを言うのを忘れているのだつたりする。私のために舞台に冷たい陰が流れる。次第に私には俳優だけの道を完遂しようとする心構えが稀薄になっていった。・・・

これまで創作劇を一度も上演しないことによって、文壇や劇壇の一部からかなり激しい非難を受けていた小劇場が、その三月はじめて創作劇を上演した。それは坪内逍遙先生の『役の行者』であつた。

これを演出する小山内先生のねらいは、どちらかというと精神的なものにあり、原作者の坪内先生のねらいは、一言で言えば、より外面的なところにあつた、とすべきであろうか？一例をあげれば、最後の行者の祈りは、坪内先生のお考えでは、傍らの藤づるを引きちぎって縄だすきをかけ、一本歯の下駄をボンボンと後へぬぎすて、足をかえるまたにひらき、合掌する形であつたが、小山内先生の演出では、ただ立ったまま手を組んで合掌するのであつた。

そういう形の上の御注意をつぎの帝劇での再演の折りには、いろいろとり入れてみたのだったが、見た人の説では、どうも初演の時の方がよかったと言う方が多かつた。思うに、坪内先生のようなやり方に、当時

のわれわれがあまりなじめなかったためではないだろうか？ ①

しかし、青山杉作の演技と演出を支えたのは、ヨーロッパの生活や風習に関する豊かな教養であった。『役の行者』でも共演し、励まされた東山千栄子は、彼が舞台の装置や仕草だけでなく、各国の風俗や社交にも精通していたことを伝える。

青山杉作の演技指導と演劇的教養（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

先生は俳優を教育し、芝居の演出をするについて、飽きるということを知らない方でした。いつも楽しうに、そして非常に熱心でありながら冗談や皮肉などを交えて、ゆとりある稽古を根気よく、何日でも何時間でも続けられました。たまたま稽古日数の短いときなど、周囲の人たちが心配すると、先生は平気なお顔でおっしゃるのです。「私は商人ですから、初日までにはかならず間に合わせます。時間があればあるように、なければないようにまとめます。大丈夫です。」・・・

一人一人の、ことに若い俳優たちの演技は、手に取るようにして倦むことなく教えていらっしやるのです。私などもどんなに先生をわずらわせたことかはかりしれません。最初私が小山内先生のご紹介で築地小劇場へいられたとき、「演技については青山先生に指導していただくように」と私は先生の手に湯

① 青山杉作「回想記」『青山杉作』四二―四四頁。

ゆだねられたのです。

青山先生は、「あなたは研究生として入ったけれど、築地小劇場は入場料をとって芝居を見せているのですから、舞台に立つ以上は、一人前の俳優でなければなりません。それには俳優として初歩から養成したのでは間に合いません。それに子供じゃなし、若くもないのだから、あなた自身あまり恥をかかずにすむように、」おっしゃって、せりふもしぐさも先生の口うつし、先生の真似だけをして私は速成俳優となったのです・・・

旅行嫌いな先生は海外に行くチャンスも、私が知っているだけでも二度もお断りになったほどで、全然外国を見ておられないのに、どうしてあも方々の国の習慣や風俗に精通していらっしやったのでしょうか。なかでも欧州のクラシックな芝居上の礼儀作法、宮廷生活や社交界、騎士道のマナー、フェンシングの型までもとてもよく知っておいででしたし、その動きや型をやっておみせになると、若い二枚目俳優よりも美しい二枚目になり、娘役よりも可憐になり、女優よりもっとしなやかで色気が漂い、王様や僧正よりもっと威厳に輝き立派でした。上品な役だけでなく、道化でも女衞でも娼婦でも、とても上手にやって見せては教えてくださいました。また、先生は喜劇が好きで、ドタダタやくすぐりでない、本格的な喜劇のテクニクに驚くほど精通していらっしやいました。①

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』一七一―一七三頁。

『役の行者』においてとくに注目された女優は岸輝子であって、女怪から美女へと変じる難役を果す。北海道の女学校を卒業した彼女は、上京して働きつつ演劇を勉強し、築地小劇場の第二期研究生に応募した。『検察官』への出演を契機に東屋三郎と結婚するが、築地小劇場の解散後昭和十年に東屋は貧血で倒れて逝去する。やがてファシズムと戦争が吹き荒ぶなかで、彼女は千田是也と再婚し、終戦間近に青山杉作や東山千栄子らと俳優座を結団した。戦後は映画人として黒沢明監督『野良犬』や山本薩夫監督『荷車の歌』にも出演する。

「晴れがましくも女優誕生」（岸輝子著『夢の切り抜き』）

私の女優としての出発は大正十四年ですから、築地小劇場ができた翌年ということになります。一緒に試験を受けた東山千栄子さん、村瀬幸子さんと私の三人、めでたく合格。晴れがましくも嬉しくも研究生となりました。というのはそれ程さまじい門で、なかなかはいれない。まア万人のあこがれの小劇場だったからです。

東山さんは夫人タイプ。村瀬さんは一寸色っぽい娘タイプ。私は少年タイプで、それぞれ役どころが違っていたのもよかったです。東山さんは美人で、村瀬さんは私は美人系なのよと言っていました。そのなかで私は自分の顔が嫌いで、悲しく思っていました。でも東山さんは、岸さんはシャレな顔をしてると言っていました。村瀬さんはあなたは日本人じゃないわねと言いました。三人三様まるつきり違った人間が、それでもかれこれ五十年ご親友として続いてきました。・・・さて小劇場にはいつて翌日から研究生としてもレッスンが始まり、おまけにそのとき稽古中だった、ハウプトマンの『寂しき人々』にも私は出演すること

になりました。同期の方では滝沢修さんと伊達修さんお二人しか記憶にありません。そのほか先輩が沢山いましたが、私が親しくしていたのは、東屋三郎と千田是也でした。それは地理的な関係もありましたが、私が珍しいモダンガールだったせいもあるのでしょう。

東屋は芝居がハネてから外松さん（あとで岡田嘉子さんの旦那さん）や私をレストランへ連れて行きました。北海道の山の中で育った私には、夜遅くレストランで楽しそうに吞んだり食べたりしているのがとても珍しかったし、すてきに自由な生活だなァと思ったりしました。

千田と一緒にいるときは喫茶店による位で、すぐ電車に乗りました。つり皮にぶら下ってむずかしい話をしていたように思います。それに劇場では私は千田の原稿の清書を手伝ったりしていたので、仲がよくなったのだと思いますが、今思うとそれがお互いに好きだったということかも知れません。

銀座を歩いていると知らない人が、今お帰りですかと声をかけたり、私の赤い帽子を亭主の好きな赤えぼしなんて言ったり、モデルになってくれませんか、電車の中で話しかけられたり、まったく世界の違った、夢のなかのおとき話みたいな、新しい女優の始まりだったように思うのです。

何回目の公演だったろう、ゴブリの『検察官』のとき、錠前屋の妻役の人が公演中に倒れて私が代役をすることになった。そのとき初めて東屋の家へ行った。東屋は一寸した私の一言をほめて、そういう風に全部言えばいいのだと教えてくれた。私もほめられた処は自然に言えて、セリフを言ってる気がしなかったの。これでいいんだとおもったが、とうとう出来ない中に終わってしまった。そんなことで私はクニちゃん（千田）とではなく、三ちゃん（東屋）と結婚することになりました。・・・

三ちゃんと結婚してから私は三ちゃんの本箱から手当たり次第に本を出して読んでいた。私は遊ぶのも大

好きだけれど、なかでも本を読むのが一番好きだった。・・・ゾラの『巴里』も感激して読んだものだった。その頃私が『戦旗』を読んでいるのを見た実斐さんが、そんなものを読んではいけないと言った。私はそうして三ちゃんの本を読んでるうちにいろいろのを知り、社会的に人道的にものを考えるようになった。・・・三ちゃんの本箱からは、政治の腐敗と権力の悪用で、弱い者がどんな目にあっているかを知った。三ちゃんあなたはよくそんな難しいものが読めるねと言っていた。①

① 岸輝子『夢のきりぬき』東京新聞出版局、一九八〇年。五―七、一〇頁。